

★★

巻頭言 勝池レポート アジア資産運用アドバイザー 勝池和夫

「貯蓄から投資」は進んでいない

★★

「貯蓄から投資」への流れは、新NISA制度の開始以降、その口座数や買付額の増加などからそこそ順調のように見えます。しかし、投資先の大半は米国株が中心のインデックス投信に偏っています。そこが問題で、多分そのような商品の購入動機は、「過去」「他人」「コスト」の三点セットです。つまり、過去数十年の株価パフォーマンスが良かった、ここ数年の売れ筋商品だった、低コストのインデックス投信だったことが人気の理由です。

これでは、「貯蓄から投資」への資金シフトが進んでいる、ましてや投資教育が成果を上げているなどとは、とても言えません。投資に重要な視点は「過去」「他人」「コスト」ではなく、「未来」「自分」「価値」にあるからです

現在の日本の個人投資家のシフトの大半は、「貯蓄から投資」というより、「貯蓄Aから貯蓄B」、もしくは「貯蓄から投機」の流れです。「貯蓄B」とは米国株のインデックス投信などへの「ほったらかし投資」です。「ほったらかし」先が銀行預金からインデックス投信に代わっただけです。

「投機」は昨年まで人気絶頂で多く投資家を買っていた、いわゆるフッシュン性が高い商品です。テスラもエヌビディアもそうですね。まるでファストファッションのように衝動買いしそうですが、その流行には限界があります。現在起きている米国株の大幅な調整は当然の結果です。

これからの米国中心の先進国経済に大きな成長は望めそうもありません。トランプ2.0が更にその懸念を世界中に広げています。エマヌエル・ドットが予見するような「西洋の敗北」はより現実味を帯びてきています。

その経済の過去をバックミラーで振り返り、「歴史は繰り返す」と思い込み偏って米国に投資することは、これからの資産形成にはあまり有効とは思えません。それらの商品が「成長投資枠」に相応しいとも思えません。

今まで大半の投資アドバイザーが執拗に「アメリカ株の独り勝ち」と唱えてきましたが、今ではその幻想は消え、反対に「トランプ大統領の独りよがり」に幻滅した投資家が増えているようです。早晩、聞こえが良かった「コア・サテライト戦略」も見直しが迫られるでしょう。多くの投資家がウォーレン・バフェットの助言のように、世界市場の前方を窓ガラス越しに見始めたようです。

他人を真似して、またマネー雑誌を参考に、流行の投資商品を追うという投資行動はほとんどの場合満足した結果が得られません。フランスのデザイナーだったココ・シャネル(写真)は、81歳で以下の名言を残しています。「流行は過ぎ去るが、スタイルは残る」"Fashion passes, but style remains".

更に値段やコストの安さが購入の決め手になった商品は後で大半が後悔する

ことになります。それはその商品の質を見ていないからです。

投資で大切なことは、その商品が長期に保有する価値があるかどうかを、自分で判断することです。右肩上がりの株価チャートや、人気の売れ筋商品情報、低コストランキングに惑わされることなく、未来を見つめ自分の投資スタイルを確立することです。それができた時、初めて「貯蓄から投資」が進み出したと言えます。

ココ・シャネル (1883-1971)

